



「しっかり女将のうなぎ屋さん奮闘記」

さとう
佐藤きよ

1931年(昭和6年)
江戸川区平井生まれ、
西一之江在住



■ 聖天通りが焼ける

昔、平井の^{しょうてん}聖天様につながる商店街があったんですよ。わたしが小さいころは、うちがうなぎも売っている佃煮屋。二軒長屋でもう一軒は駄菓子屋さん。路地をはさんでお蕎麦屋さん、お寿司屋さん、お菓子屋さん、床屋さんの4軒長屋。その先は布団屋さんと馬肉屋さん。プラスチック加工をしている家があって、八百屋さん、魚屋さん。それから、丸十っていうスーパーマーケットのように何でも売っている店が一番端だった。

わたしは長女。小さいころはお転婆で、近所のガキ大将だったんですよ。わたしが喧嘩に負けて帰ってくると、おばあさんに「もう一回やってみて」と、丸めた新聞を持たされたりしてね。父は、昭和12年に始まった日中戦争に江戸川区から出征した最初の人だったんです。それでわたしは小学生のころ、「出征軍人の家族」という紫のバッジをつけて、ちょっと威張っていました。

昭和20年3月10日、当時わたしは14歳。東京に大空襲があったんです。風が強くて川向こうの^{あづまちょう}吾嬬町(現墨田区立花)の方から、焼け棒杭が飛んで来て、うちの裏にあった茅葺屋根の家に燃え移っちゃったんです。わたしは、母と妹と、お隣のお蕎麦屋さんの家族4人と一緒に逃げました。

貯水池がある方へ逃げようと総武線のガード下まで来たら、上にあった貨車が真っ赤に燃えているんです。そこで引き返し風上に向かいました。土手の上へ行ったらすごい風で、手をつないでないと飛ばされちゃうんですよ。4才の妹が「寒い、寒い」と泣くんで、聖天様の裏のお墓に行って夜を過ごしたんです。

夜明けを待って戻ってみると、商店街も私の家も焼けてました。「生きてるよ」って田舎に知らせに、「わたしが行く」って一人で出かけたんです。そのころ父は退役して家に戻っていたけれど、わたしは長女だから、何でもやんなくちゃと思うからね。

平井橋を渡って、今の花王石鹼という会社がある福神橋まで行くと、真っ黒焦げのマネキン人形のようなものが、いっぱい道端に重ねて並べてあって。それが押上の方まで続いていたんです。はじめはひとりずつ手を合わせて

拝みただけで、そのうち何も感じなくなっちゃうのね。そこを夢中で通り抜けて雷門まで歩きましたよ。雷門からはぎゅうぎゅう詰め地下鉄で上野駅に出て、高崎線で熊谷まで行ったんです。

■ 家族と疎開

田舎から帰ってすぐ、疎開することになったの。田舎には、母の実家や父方のおじいさんが隠居用に建てた家がありましたのね。母と妹を汽車で行かせ、父が自転車で食料品や布団などを載せたりヤカーを引き、わたしが後ろに付いて行ったんです。でも、私は熊谷までは歩けなくて、上尾から汽車に乗ったの。父は皆が田舎で落ち着いたことを見届けて、東京に帰って行ったんですよ。

父は商売が好きで、18歳の時、自分で決めて厩橋の海老問屋さんへ奉公に行ったそうよ。母はすごく静かな人。お嫁に来るまで、佃煮やすずめ焼きを作る父の商売のことを知らなかったんです。

父がほとんど戦争に行っていたので、母親は仕事一本で子どもの世話は一切できない。わたしの面倒は、おばあさんと父の妹がみてくれたんです。おばあさんは、商人には必要だろうと、夜わたしを抱き寝し九九や暗算をさせていましたね。

昭和20年に疎開したまま、母とわたしと妹は熊谷に住んでいたんです。わたしは、子どものころからNHKラジオの歌番組の「うたのおばさん」になりたかったの。それで女学校では、毎日暗くなるまで発声練習していました。新制高校卒業後、校長先生の紹介で中学校の音楽の教師になったんです。

父は、昭和28年5月に松江大通り商店街の今の場所に川魚の仲買・卸の店を構えて、わたしの従兄が学校へ行きながら手伝っていたのね。ところが、その従兄が配達の際に怪我して入院しちゃったんですよ。決まっていた就職もだめになったので、「うちで面倒をみなくちや」と言うことになったわけ。

わたしは3年間勤めた中学校を退職して、日本人形の製作を習いに行っていたんだけど、妹弟と一緒に東京へ戻って来て、母と交代で従兄を看病したんですよ。それ

